

## 6 データドリブン系ビジネス創出

# ビッグデータを有効活用し、地域金融機関のビジネスモデル変革と収益多角化に貢献

「昨今、金融機関はこれまで軸にあった金利収益に囚われず新たなマネタイズ手段を模索している。NTTデータは、金融機関のマネタイズを支援するためには、ビッグデータの活用がキーになるとの考えの下、データドリブン経営に繋がるソリューションを整備している。」

### ITの進化がビッグデータ活用の可能性を創出

かつて金融機関が保持するデータと言えば、口座残高・取引履歴と融資先企業の財務情報がその代表格であった。今日では、お客様のWeb操作、店頭での会話、ATM利用等のコンタクト履歴や、お客様間の取引関係といったデータの活用に注目が集まっている。これらのデータは膨大であり、コストの観点から金融機関の管理対象外として扱われていた。

しかし、ITの進化によりデータを取り扱うことに関するコストが劇的に低下したことに伴い、ビッグデータを有効に活用することで金融機関の付加価値や差別化を生み出せ

る可能性が生まれている。

### ロングテールを描くビッグデータの活用

NTTデータはビッグデータの意味合いを図1のように捉えている。誰もが重要と考えるマスタ・事実・勘定・行内といった基幹データはこれまで優先的に整備され、活用されてきた。しかし見方を変えればどの銀行も一様に重要視してきた基幹データは、今では“枯れた領域”でありコモディティ化しているとも言える。一方、これまでそれほど注目されてこなかった基幹データ以外のデータは裾野が広くロングテールを描く。基幹データにもう一段階分析を加えることにより生まれる派生データは他行との差別化要素になりえる可能性があり、図内右側を占める個客行動やオープンデータ、IoTデータといった新たなデータは、これまで管理不能だっただけに未知数の可能性を秘めている。



株式会社 NTT データ  
第二金融事業本部  
オファリング推進室  
室長 小祝 伸介氏

### データドリブン系ビジネスへの取り組み

上述の観点からNTTデータは、派生データ・新たなデータに着目しデータドリブンへの取り組みを推進している。

ユースケースとして次頁からデータドリブン経営を支える基盤「SIC」のトータルコンセプトとサービス群、AI技術によるデータ活用サービス「finposs」、JA業界の複数事業にまたがるデータ活用する相続支援サービス「inagri」、地銀10行が共同でマーケティングを実施するスキーム「共同MCIF」について紹介する。

あわせて、情報系システムのクラウド化を推進するJA業態の取り組みを技術トレンドとして紹介したい。

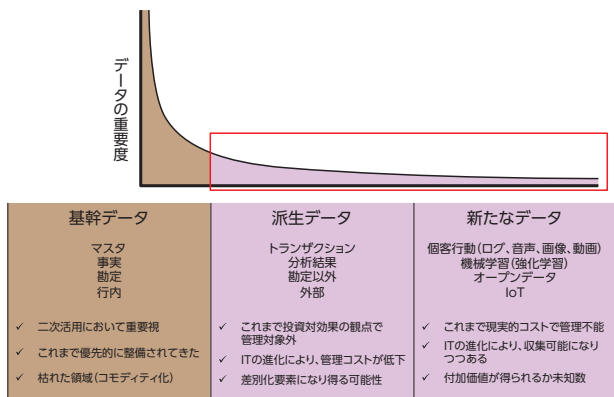


図1 ビッグデータ活用の意味合い